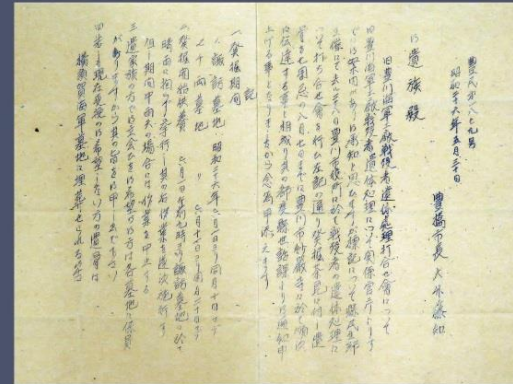


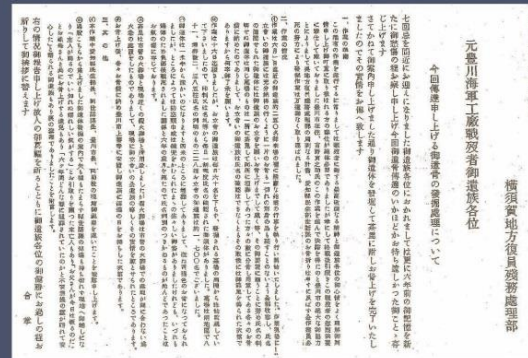
6年後の遺体発掘

昭和20(1945)年8月7日の空襲で犠牲となった工員の遺体は、犠牲者数が多く火葬施設が不足したことや、夏場で遺体の腐敗が進むことなどから、諏訪と千両に急造された墓地に仮埋葬されました。しかし、戦後工廠は解散してしまったため、この墓地は管理者を失ってしまい、遺族の心情をよそに広い墓地には雑草すら伸びて市民の心を暗くしているような状況であったようです。

そして終戦より6年余りの歳月が経過した昭和26(1951)年6月、呉地方復員局残務処理部により、遺族が待ち望んだ遺体の発掘が行われることとなりました。発掘は6月1日より諏訪墓地から始まり、多くの遺族がこれに立会いました。遺体の中には防空頭巾や鉄兜をかぶったままの姿で発掘されたり、千両墓地では地下水のため腐敗しないでロウ人形のように残っているものもありました。しかし遺体のほとんどは白骨化し、両墓地に埋葬された2,385柱のうち氏名が判明したのは228柱でしかありませんでした。発掘に立ち会った遺族はわずかに判別できる着衣の柄や腐敗しない印鑑・時計など当時の所持品に記憶を呼び起こし、変わり果てたわが子、わが夫にむせび泣き、その姿を見た発掘人夫や市吏員はもらい泣きしたといえます。



豊川海軍工廠戦没者遺体処理打合せ会について
空襲犠牲者の遺体発掘日程などを遺族に通知した文書。



今回伝達申し上げる御遺骨の発掘処理について
『嗚呼豊川海軍工廠 第十三集』所載
昭和26年6月に行われた遺体の発掘作業の経過などを、空襲犠牲者の遺族へ伝える文書。

体験者の証言

終戦から数年後、父と一緒に千両の埋葬地に行きました。おそらく、空襲犠牲者の発掘を行う連絡があったのだと思います。……